

幸せとは何か。これは以前ならほとんど考えることはなかったテーマである。それがここ10年ほどの間に、少しは考えるようになった。そしてここ数年は、考える頻度が上がってきた。とは言っても、いつも明快な答えが出るわけではない。

人は幸せになるとか、幸せになりたいというようなことを言う。果たして、人は自らを幸せにすることはできるのだろうか。そんなことを思うことがある。

幸せになろうとすることは何かを期待することとも言える。だが、その期待は多くの場合裏切られる。他人がいつも自分の都合よく動いてくれることなどあり得ない。にもかかわらず期待してしまう。だからいつも失望してしまうわけである。幸せになろうとすることそのものが不幸の元になってしまう。

そこで、考え方を変えてみる。自分が幸せになるのではなく、人を幸せにするのである。自分が幸せになれない分、相手に幸せになってもらうのである。

どんな相手でもお世話になっていることには違いない。ならば、今までならば気分を損ねていたことがあったとしても、その代わりに、全力で感謝の意を表明するようにする。メールが来たら、すぐに返信する。「お世話になります」「ありがとうございます」と添える。相手からの反応があるとは限らない。それでもわるい気分ではない。最初から期待していなければカリカリもしない。

相手が喜びそうなことをする。意識すればけっこうできるものである。そうすると、意外と世界は一変するものである。自分がよくない状況にあっても、周りはみな笑顔で幸せそうである。もしかしたら、これを幸せというのかもしれない。うまくすると、自分がよくない状況にあることもわからなくなってくる。

幸せについて考えるようになった契機は、2011年（平成23年）3月11日、14時46分からの出来事である。あの当時は、とてもとても10年後など想像もできなかった。1年先さえ全くイメージできなかった。それが、10年が経過し、今日という日を迎えている。人の思いや気持ちなど関係なく、月日は着実に進んでいく。

この10年は、予定していた道程なのか。それとも違っているのか。検証する術もないが、はっきりしていることは、一步一步前には進んでいるということである。それを“復興”というのかもしれない。

まだ10年、もう10年、感じ方は人それぞれである。一つ言えることは、10年という歳月、今日という日がゴールではないということである。通過点にしか過ぎない。だが、大きな節目であることには違いない。果たしてゴールがあるのかどうか、ゴールがどこなのか、それすらもよく分からないのが正直なところである。

この10年で、大震災とコロナ禍という通常では経験できないことに遭遇したことになる。普段は意識しないままに生きているが、改めて考えてみると、大きな歴史の転換点にいるのかもしれない。それが幸せなことだという人はいないであろう。起きていることは不幸なことかもしれないが、どんな状況でも人を幸せにすることはできるし、結果的に自分も幸せになれるかもしれない。明日からまた前に進んでいこうと思う。